Sちゃんが動き出すまで

守永　英子

Sちゃんは、間もなく三歳になる女の子である。二歳児講座に参加しているので、母親と一緒に、週に一度、通ってくる。アコーディオンカーテンで少し仕切られた部屋の向こう側で、母親が講義を聞く間、こちら側の、遊具のあるところで、他の子どもたちと一緒に過ごす。

子どもたちは、絵本を見たり、室内用の小さな滑り台で滑ったり、ままごとをしたり、線路に電車を走らせたり、思い思いにしたいことをして遊び、保育に当たる大人や、他の子どもたちと、自然な触れ合いの機会を持つ。年齢の幼い子どもたちのことであるから、母親から離れにくいこともあり、母親に、そばにいてもらうことで、やっと自分の活動ができたり、講義を聞く母親のひざの上にいることで、安定感がもてたりすることもある。

S子は、ここでは、あまり積極的に遊べる方ではなく、口数も少ない。一方、Y子は活発で、自分が欲しくなると、他の子どもが手に持っているものでも、自分のものにしてしまう。そのY子がそばに来ると、S子は、表情をこわばらせて、手に持っているものを、Y子に渡してしまうというふうであった。

今回で、八回目であったが、年末や正月が間にはいり、何週間か間があいたせいもあってか、S子の表情は、今日もほぐれなかった。

机のところでは、何人かの子どもが、絵をかいたり、シールを紙にはって遊んでいた。S子は机のところにいたが、少し遅く来たこともあってか、まだ、何かを始めたふうでもなく、じっと腰かけているだけのようであった。

前に私と遊んだことがあったのを、S子は覚えているだろうか。確信がないままに、私は、そっとS子のそばに近づいて腰かけた。S子は無表情に、じっとしていたが、私が、机の上のシールを取りあげて、「シール、はる?」と声をかけると、かすかにうなずいた。S子の前に紙を広げ、シールを一つ、台紙からはがして手渡すと、S子は、受けとって紙にはった。次に渡したシールも、S子は、紙にはる。私がシールをS子に渡し、S子が紙にはる活動は、自然な流れになった。

二人の活動の流れに、もう少し、S子からの積極的な気持ちを引き出せないだろうか。私は、働きかけを、少し変えてみようと思った。シールを台紙からはがすときに、「今度

は、どれにしようかな？　丸にしようかな？　それとも三角にしようかな？」と、つぶやいてみる。S子の、シールへの関心を、もう少し引き出せないかという試みである。「丸にしてみよう。はい、小さい丸いの」「今度は、大きい四角の」と渡すと、S子は、渡されるシールを次々はった。はっているうちに、偶然、目や口のようになったので、「これ、お顔みたいね」と、気持ちを引き立てるように言ってみるが、あまり反応はない。

今度は、もう一歩すすめて、シールをはがすときに、「どれにする？」と、S子に選ばせてみる。S子は、自分で形を選び、黙って指す。シールを渡すとき、S子が受けとるのを待たずに、ふざけて、S子の指にくっつけるようにして渡すと、一瞬、たじろいだようであったが、すぐに慣れて、おもしろがって、くっくっと笑った。やっと少し、ほぐれたようであった。

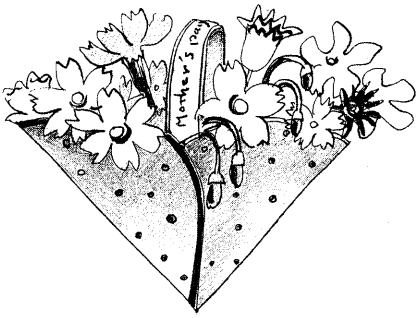
「今度は、別の色にしてみる？　どの色がいい？」S子は、何色かあるシールの中から、自分で選び、自分ではり始めた。赤い大小の丸が三つ、目・口のように並んだとき、S子は、私を、つついた。〝見て欲しい〟という仕ぐさと受けとめて、「ほんと、又、お顔みたいになったわね」と言うと、S子は、満足したのか、又、シールをはり続けた。S子のシールはりは、おやつになるまで続いた。

おやつは、「いただきます」を待てない子どもの多い中で、S子は、いつもあまり食べたがらない。今日も、食べるようすもなく、腰かけているだけ。「食べないの？」「どれが

好き？」などと声をかけても、反応がない。働きかける方向を少し変えて、「ママと食べたいの？」と聞くと、うなずいて、講義を聞いている母親のところに行ってしまった。せっかく母親から離れられていたのに、母親のところへ行く切っ掛けを作ってしまったのは、失敗だったかな、と思ったが、S子は、間もなく、母親を伴って、おやつのところへ戻ってきた。母親は、別に何も積極的な働きかけをするわけではなく、そばにいるだけであったが、S子は、おやつを食べ始めた。そして表情が少し明るくなり、立ち上がって、動き出した。時どき跳びはねるような動きが見られるのは、気持ちも弾んできたのだろうか。次第に、部屋の中を、あちこち動きまわり、ぬいぐるみの動物を見つけてきた。「お母さんが見ていてくれるだけで、元気がでてくるのね」と、思わず母親に声をかけ、顔を見合せて、にっこりするほどの、S子の変化である。

S子は、ゴムまりと、人形と、ぬいぐるみの動物を二つを抱えて動きまわり、時どき、まりを投げては、自分で拾う。動きが少しずつ大きくなり、人形などを抱えたまま、まりで遊ぶのは大変になったのか、S子は、私のところに、人形や動物を持って来て渡した。そして、まりだけを自分で持ち、一層、自由に動きまわった。S子に渡された人形たちを、私は、S子から預けられたと解釈し、カーディガンの中に、しっかりと抱きかかえ、S子は、そこを基地と定めて、安心したかのようであったが、そのあと、人形を、受けとりにくるわけでもなかった。

母親が、講義を聞くために席に戻ってから、終わるまでの三十分ばかり、S子は、母親がそばに居なくても、明るい顔でかけまわり、滑り台をすべり、元気に遊んだ。

集団保育のように、一人で何人もの子どもをみなければならない場合、遊べない、乱暴をする、はさみを使っていて危ない、などと気にかかることがいくつもあって、心忙しく、つい子どもを外側から眺めてしまう。しかし、今回のように、じっくりと一人の子どもに付き合って、遊び始めるまでの心の軌跡を共に歩んでみることは、普段はなかなか経験することのできない、興味深いことであった。

（元・お茶の水女子大学附属幼稚園）